

科目 植物で読む源氏物語

講師名 塚内 千寿子

「源氏物語」の中の花や草木がどのような役割を持っているか。名場面を切りとり、原文を解釈しながら考えていきます。(細かい解釈よりも内容の解説に重点を置きます。)

ダイジェスト版としても物語を楽しめるよう、巻の若い番号から並べてみました。

【会場】中央くすのきカルチャーセンター

【曜日】第2・4木曜日

【時間】9:00～11:00

【教材費】500円

【指導内容または作品名】

回	月日	植物名	巻名	解説
1	10/23	撫子	紅葉賀(7巻)	源氏と藤壺の心が交錯する和歌を中心に「撫子」の物語における使われ方。
2	11/13	橘	花散里(11巻)	「橘」の香りが想起させるもの。古歌をふまえて平安人共通の約束事を確認する。
3	11/27	松① 松②	薄雲(19巻) 初音(23巻)	松が和歌で使われる様々な意味。
4	12/11	浜木綿	乙女(21巻)	夕霧の疑問。なぜ父君は美しくない花散里を愛するのか。古歌を踏まえて納得。
5	12/25	紅葉 等	乙女(21巻)	・六条院の植栽と女君達。 ・衣の色目。 ・「紫の上」と「中宮」の紅葉の贈答。
6	1/8	藤袴	藤袴(30巻)	喪中の求愛に詠まれたものが何故、この花か。
7	1/22	藤	藤裏葉(33巻)	夕霧と雲居雁との引き裂かれた恋の行方。結婚の許可に使われたものは何か。平安の雅。
8	2/12	桜①	若菜・上(34巻)	美しい貴公子と舞い散る桜。悲劇の始まりを桜でつづる。名場を味わう。
9	2/26	桜②	若菜・上(34巻)	夕霧と柏木が歌に読み込んだ「桜」とは誰のことか。本意はどこにあるか。
10	3/12	色々	若菜・下(35巻)	たとえられた花から想像できる女君達の容貌と人柄。

「源氏物語」は心理描写と自然描写が秀逸なお話です。

沢山の植物が登場しますが、単なる「物」としての扱われ方とは違います。

- 1 女性の内面と外見の美をととえる。
- 2 目の前にない植物をあえて詠み、「古歌の意味」から表現する。
- 3 その植物が持つ、平安人共通の約束事・意味を知っているという前提。
- 4 掛詞としての植物を示すことで、気持を表現する。
- 5 植物がかもす美しい風景。
- 6 植物を示すことである行為を促す。
- 7 衣装の色あわせにも四季の草花を意識している。